

21 世紀も資本はすべての人間を導く主であり続けることが可能か

2020 年 12 月 24 日

法政大学法学部

水野和夫

「私的な利益こそ、すべての人間を導く主である¹⁾」(グイチャルディーニ²⁾) のは近代社会の大前提である。ところが、1990 年代以降、ナオミ・クラインがいう「ショックドクトリン」(惨事便乗型資本主義) が横行するようになり、資本家は今回の新型コロナショックという大惨事さえも利用して資本を増やそうとしている。NY ダウは 11 月 17 日に 29950 ドルで引け、9 ヶ月ぶりに最高値を更新した。さらに、11 月 24 日には初の 3 万ドル台に乗せた。それに連動して日経平均株価は、11 月 17 日に 2 万 6014 円と、1991 年 5 月以来 29 年ぶりに 2 万 6 千円台を回復した。バブルは生成して弾けるのではなく、弾けさせるためにつくるのである。

中世キリスト教社会は「神(聖書)は嘘をつかない」という人々の確信の上に成り立っていた。しかし、11～13 世紀にかけて都市化が急速に進展し、「商人の時代」となると、教会も事実上の銀行業務³⁾を行い、聖書で禁止されていた利子を取るようになった。14 世紀になると黒死病がヨーロッパを恐怖に陥れ、それになすすべもないキリスト教会は権威を失いつつあった。また、贖宥状を発行し、罪を金で贖い儲ける教会に対して信者は不信を募らせるようになった。いわば、教会は嘘をついていると疑われるようになったのである。教会からすれば、蓄財は都市化と貨幣経済化に対応し、信者を救済するための行為であったが、原理原則とあまりに大きな乖離が生まれたのである。

16 世紀に利益が人々を導く主となって以降、利益を生み出す資本が社会の中心に座した。シェイクスピアは『マクベス』(1601-1602 年)の冒頭、雷と稲妻が轟く場面で三人の魔女に「きれいは穢い、穢いはきれい。さあ、飛んでいこう、霧のなか、汚れた空をかいぐり」と言わせている。『ヴェニスの商人』(1596 年)の冒頭では、アントウニオウが「実際、何故こう気がふさぐのか、わからない」と言う。4 世紀以上たって、ケインズが「わが孫たちの

¹⁾ クリスチャン・ラヴァル(2015)によれば、フランチェスコ・グイッチャルディーニ(1483-1540)は「利益の支配こそ、普遍的な鍵の役を果たし、その信奉者に繁栄、権力、さらには新たな道徳への道を開くと」(pp.39-40)と主張した。

²⁾ グイチャルディーニは、「マキアヴェッリ(1469-1527)より若い同時代人で、結局(マキアヴェッリを含めて)一般的に同意されているところでは、マキアヴェッリに比肩するただ一人の政治思想家である」(ジョン・ポーコック [2008] p.113)。

³⁾ 十字軍遠征にともなって 1119 年ころ創設されたテンプル騎士団は銀行業を行っていた。詳細は、フランシス・ギース(2017) p.174 参照。

経済的可能性」(1930 年)で「少なくとも 100 年間、自分自身に対しても、どの人に対しても、公平なものは不正であり、不正なものは公平であると偽らなければならない。なぜならば、不正なものは有用であり、公平なものは有用でないからである」(p. 399)と述べている。ケインズのいう「公平なものは不正であり、不正なものは公平である」は「きれいは穢い、穢いはきれい」と同じ表現 (fair is foul and foul is fair; for foul is useful and fair is not) である。シェイクスピアが近代の黎明期に抱いた漠然とした不安は、未だに解消されていない。近代社会とは「偽りの時代」だったことになる。

ケインズの心配

100 年後の 2030 年にケインズはこの偽りに終止符をうてると期待していたが、同時に心配もしていた。「重大な戦争と顕著な人口の増大がないものと仮定すれば、経済問題は、100 年以内には解決されるか、あるいは少なくとも解決のめどがつくであろうということである」([2030] p. 393)。しかし、人間は「われわれはあまりに長いこと、楽しむようにではなく、懸命に努力するように訓練されてきた」(p. 395) から、「人間は真に恒久的な問題—経済上の切迫した心配からの解放をいかに利用するのか、科学と指數的成長によって獲得される余暇を賢明で快適で裕福な生活のためにどのように使えばよいのか、という問題に直面するであろう」(前掲書、p. 395)。しかし、2030 年になってもそれに取り組まずに、相変わらず財産としての貨幣愛を追求しているのではと懸念していた。

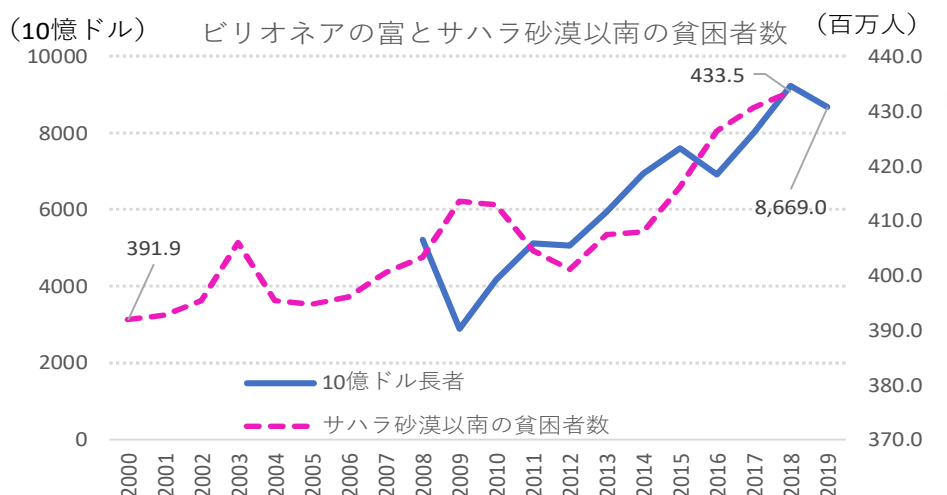
ケインズのいう「真に恒久的な問題」に取り組むことができるのはゼロ金利になったときだ。日本とドイツとフランスはその条件をクリアしており、英国の 10 年国債利回りも 0.23% (2020/12/23) と概ねゼロ%である。G5 (主要先進 5 ヶ国) のなかで最も利回りが高い米国でさえ、0.93%と 1.0%を下まわっている。キリスト教会が 13 世紀に利子をとることを容認し、利息のつくお金が「資本」と認識されるようになって 8 世紀が経過したが、マイナスないしゼロ金利に到達した国は、今回を除けば皆無である。過去、最も低い金利を記録したのはイタリア・ジェノバの 1.125% (1619 年) である。グイッチャルディーニ (2001) が 1561 年に著した『イタリア史』で、当時のイタリアを「山間の不毛な土地も、肥沃な地や平野もともに良く耕され、(略) イタリアは他の国々の間に輝かしい名声を博するに値していた」(p. 38) と述べている。イタリアの資本家は投資先をオランダに見出したのだった。

21 世紀の現在も 17 世紀始めのイタリアと同様に優良な実物投資先がない。NY ダウが最高値を更新しているのは資本家が投資の場を「電子・金融空間」に移したからである。オックスファムの報告書 (2020) によれば、世界のビリオネアは 2019 年時点で 2153 人、総資産額は 8.7 兆ドルに達している。世界の富裕者が資産を増やすのは、NY のウォール街に代表される株式市場である⁴ (図 1)。ビリオネアの資産は、世界の総人口 78 億人のうち下位 6 割

⁴ ビリオネアの資産額を y 、NY ダウを x として回帰式を計算すると、 $y = 0.2745x + 1638.7$ 、 $R^2 = 0.7919$ となる。 X に 3 万ドルを代入すると、 $y = 9.9$ 兆ドルとなる。

に相当する 46 億人の資産 8.1 兆ドルを上回っている。益々富を増やす富者がいる一方で、サハラ砂漠以南の絶対的貧困者（1 日 1.9 ドル以下で暮らす人）は増加している⁵。

（図 1） 富める富者と増加する絶対的貧困者数



（出所） OXFAM（2020）"TIME TO CARE Methodology note"、
World Bank"World Development Indicators"

グローバル化で世界市場が一体化しているのであるから、株式市場もサハラ砂漠以南の経済も、市場メカニズムを通じて相互依存関係にある。グリーンズパン FRB 議長（当時）の予想によれば、グローバル化は「ほとんど疑いないのは、多少の問題があろうとも、グローバル金融の並外れた変化が世界の経済構造と生活水準を格段に進歩させるのに寄与」（ステイーガー [2005] p. 138）するはずであったが、事実はまったく逆である。グローバリゼーションとは、結局、ハーヴェイ⁶がいうように「資本蓄積のための条件を再構築し経済的エリートの権力を回復するための政治的プロジェクト」（p. 32）だったことになる。

21 世紀になってケインズ（1930）の予想どおりゼロ金利になって、富の蓄積がもはや社会的重要性をもたなくなった。そうなってもケインズは、貨幣愛を止めない富者がいるだろうと懸念し、次のような処方箋を考えていた。「富の蓄積がもはや高い社会的重要性をもたないようになると、（略）財産としての貨幣愛は、ありのままの存在として、多少いまいましい病的なものとして、また、震えおののきながら精神病の専門家に委ねられるような半ば犯罪的で半ば病理的な性癖の一つとして、見られるようになるだろう」（p. 397）。貨幣を追

⁵ 世界銀行の“World Development Indicators”によれば、1990 年に 28 億人だったサハラ砂漠以南の絶対的貧困者は 2.8 億人だったが、2018 年には 4.3 億人に増加している。

⁶ 正確にはハーヴェイのこの定義は新自由主義についてだったが、グローバリゼーションと新自由主義は資本の自由化を重要施策としている点で共通性がある。

求するのはもはや不必要となったので、社会的隔離をしろということである。

ケインズの基本的認識は、資本（富）の蓄積は不正が伴う場合が多いということである。そうであったとしても、資本は国民生活を豊かにする限りにおいて、「不正なものは公平であると偽らなければならない」というのである。17世紀始めのシェイクスピアの指摘以来400年間、近代人は偽ってきたのであるが、ゼロ金利社会になってようやく「不正は不正だ」ということができるのである。

マルクスが見抜いた資本の本質とケインズが望んだ社会

資本蓄積は将来の生産力増強をもたらす。その結果、平時においては生活水準を高め、非常時（自然災害など）においては人類の救済につながる。だから、人々は所得の全額を消費しないで、一部現在の消費を我慢して、貯蓄するのである。貯蓄が投資にまわり、投資の蓄積が資本となる。資本の源である貯蓄には救済の意味があり、コレクション（蒐集）も救済の意味がある。人類史とは「蒐集」の歴史なのである。「蒐集」の目的は社会秩序の維持にあり⁷、「蒐集」の対象は13世紀以前は霊魂であったが、その後資本となった。資本は人類、あるいは国民の危機に備えるために過剰なまでに蓄積するのである。

新型コロナによる世界的なパンデミックにおいて、ビリオネアは救済に一向に乗り出す気配はない。マルクス（2005）の資本に対する見方が秀逸である。すなわち、地球が減びても、資本家は火星などほかの惑星に逃げ切れると思っている。「将来の人類の衰弱や、結局はとどめようもない人口減少が見込まれるからという理由で資本が実際の運動を抑制するというのは、いつか地球が太陽のなかに落下する可能性があるという理由でそうするというのとどっこいどっこいの話である」（p. 395）。そして、「いかなる株式投機においても、雷はいつか落ちるにちがいないということは全員が知っている。しかし、その全員が、雷はいつか自分自身が黄金の雨をたっぷり受けて安全な場所に逃げおおせた後で、隣人の頭上に落ちるだろうと思っている。洪水は我れ亡きあとに來たれこれがあらゆる資本家と資本家国家の合言葉である」（前掲書、p. 395）という。

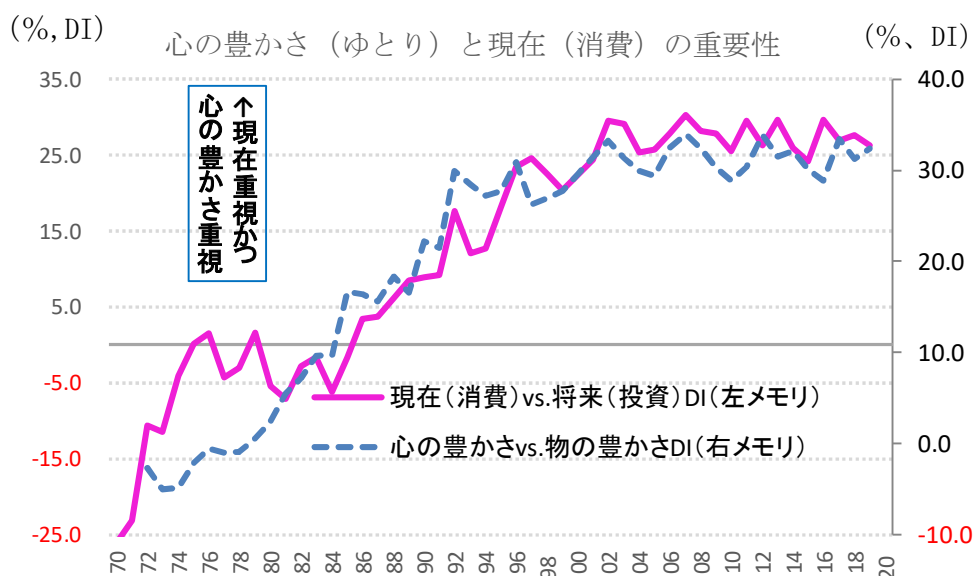
資本を常時国有化したソビエトは解体したのだから、人類の危機において、すなわち例外状態においては、過剰に蓄積された資本は国家の所得再配分機能により有効に活用されるべきである。しかし、国家は感染症対策を実施するのに国債の大量発行しか頭がない。そのつけとなる将来の増税に対して、富裕者は節税対策など対抗手段をもっているが、多くの国民はそれを有しない。中世のキリスト教会が黒死病に対処できなかったように、近代国家も同じ轍を踏もうとしている。利益の蓄積としての資本はもはやグイッチャルディーニがいったように「すべての人間を導く主」ではないのである。

そういう状況下で、ゼロ金利の国は新型コロナ危機を乗り越えた先には、ケインズ（1930）のいう「明日のことなど少しも気にかけないような」（p. 399）社会を構築できるのである。

⁷ ジョン・エルスナー/ロジャー・カーディナル編(1998)、p.11 参照。

この社会は経済成長を目標とする必要はない。すなわち消費を我慢して投資する必要がない社会である。ゼロ金利社会とは、昨日も今日もそして来年も豊かな社会であるからである。内閣府のアンケート調査によれば、21 世紀になってゼロ金利になったのと時を同じくして今後の生活について「毎日の生活を充実させて楽しむ」という人が「貯蓄・投資など将来に備える」と答えた人のおよそ倍存在する⁸（図 2）。それは同時に、物の豊かさよりも心の豊かさを重視する生活を望んでいる。

（図 2）経済成長を望んでいる人は少数派



（注）1. 将来（投資）か現在（消費）かDI＝毎日の生活を充実させて楽しむ
 －貯蓄・投資など将来に備える
 2. 心の豊かさか物の豊かさかDI＝心の豊かさを重視－物の豊かさを重視
 （出所）内閣府 「国民生活に関する世論調査」

「すべての人間を導く主である」私的な利益を増やすには、「より速く、より遠く、より合理的に」な行動が必要だった。しかし、過剰な資本を積み上げた 21 世紀の先進国においては、「よりゆっくり、より近く、より寛容に」がポストコロナ社会の行動原理となるであろう。それがケインズのいう「明日のことなど心配しない社会」を構築することにつながるのである。

以上

⁸「国民生活に関する世論調査」（2019 年）で「毎日の生活を充実させて楽しむ」と答えた人は 59.2%で、「貯蓄・投資など将来に備える」は 32.9%。

(参考文献)

- クリスチャン・ラヴァル (2015) 『経済人間 ネオリベラリズムの根底』原著 2007、菊池昌
実訳、新評論
- ジョン・コーポック (2008) 『マキャヴェリアン・ムーブメントーフィレンツェの政治思想
と大西洋圏の共和主義の伝統』原著 1975 年、田中秀夫・奥田敬・森岡邦奏訳、名古屋大
学出版会
- フランシス・ギース (2017) 『中世ヨーロッパの騎士』原著 1984 年、椎野淳訳、講談社学術
文庫
- J・M・ケインズ (1930) 「わが孫たちの経済的可能性」『ケインズ全集 9 説得論集』宮崎
義一訳、東洋経済新報社、1981 年
- フランチェスコ・グイッチアルディーニ (2001) 『イタリア史 1 (第 1 巻、第 2 巻)』末吉
孝州、太陽出版、2001 年
- Oxfam (2020) “TIME TO CARE”
- マンフレッド・B・スティーガー (2005) 『グローバリゼーション』原著 2003、櫻井公人 櫻
井純理 高嶋正晴訳、2005、岩波書店
- デヴィッド・ハーヴェイ (2007) 『新自由主義 (NEOLIBERALISM)』原著 2005、渡辺治監訳、
森田成也、木下ちがや、大屋定晴、中村好孝訳、作品社
- ジョン・エルスナー/ロジャー・カーディナル編(1998) 『蒐集』、原書 1994、高山宏/富島美
子/浜口稔訳、研究社
- カール・マルクス (2005) 『資本論 第一巻 (上)』マルクス・コレクションIV、原著 1867 年、
今村仁司・三島憲一・鈴木直訳、筑摩書房